

日本語の音韻組織とローマ字表記*

八木克正

(帝塚山大学非常勤講師)

はじめに

わが国における日本語のローマ字表記についてはさまざまな誤解がある。そのひとつに、例えば *iti* と書くと「いち」とはならず「イティ」になってしまうから *ichi* と書くべきであるといった極めて素朴なものがある。このような考え方は、英語教師が中学生に教えるいわゆる「標準式」あるいは「ヘボン式」といわれるローマ字表記がもっとも正しく日本語の音を表しているという誤解に根源があるように思える。¹

わが国のローマ字教育は、小学校で内閣訓令式を教え、中学校で英語を習い始めると「標準式」を教えるのが一般的である。² 本来ならば英語の教師は小学校で学んだローマ字と違う書き方のこのローマ字は「標準式」とか「ヘボン式」とか言わずに、「英語式」とであると言うべきなのだが、一般的に *iti* は「イティ」になってしまうなどと言うことが多いので、あたかもローマ字表記は英語式の書き方が普遍的なものであるかのような印象を与えてしまう。そのために、例えばドイツ語の中で *Tokio* などと書いていると違和感をもったりする。明治以降、フランス語式、ドイツ語式、オランダ語式、スペイン語式などヨーロッパの諸言語の音の表記をまねた多くの日本語のローマ字表記があったことを思えば、今生き残ったもののうち「英語式」を「標準式」というのはわが国における英語の影響力の大きさを示すものと言える。

しかしながら言語はそれぞれ独自の構造と組織をもっているのであって、日本語を英語の音の表記（綴り）をまねて表すには少々問題がある。本稿の目的は、日本語の音韻組織にもっとも対応しているのは「日本式」ローマ字であることを明らかにすることにある。具体例として、日本語の数詞の音韻変化の説明には「日本式」でなければならないことを明らかにする。もっと具体的には、数詞の「本」が、

- 一本 → *ippon*
- 二本 → *nihon*
- 三本 → *sanbon*

のように *pon, hon, bon* と音変化をするが、それはなぜかということを音声、音韻、音韻規則という考え方を使って説明することにする。この説明は、あらゆる日本語の数詞やその他の音韻変化を説明できる普遍的なものである。

本稿では3つの表記を使う。イタリック体はローマ字表記，[] は国際音標文字(IPA) による音声表記，/ / は国際音標文字による音韻を表記するものである。

1 音声と音韻

まず、音声(sound)と音韻(phonological unit)という考え方を説明しておく。すべての言語は音声を使う。文字をもたない言語はあるが、音声をもたない言語はない。言語にとって文字は派生的、二次的なものであると言われる所以である。言語を言語たらしめる音声を記述する時に、あるひとりの人の発音の中で聞き分けることのできるすべての音声を別のものとして記録分類するとすると、おそらく記録された音声は膨大な数にのぼるであろう。日本語でごく普通に使われる鼻音を記録すると、[m] [n] [ɲ] [ɳ] といったものがあるし、母音³でも、[a] [i] [u] [e] [o] の他に、無声化した[i] [u] とか、鼻音化した[a] [e] [o] などが容易に観察できる。このように、われわれの耳（実際にはこれらの音を区別するためには特別に訓練された音声学者の耳が必要だが）で区別できる音を音声ということにする。⁴一方で、ごく一般的に日本語を母語とする人は、例えば「おしまいの「ん」」（以下では「撥音」と言う。記号では /N/、ローマ字表記では *n'* で表す）といえはひとつの音であると無意識的に思っているし、母音は5つであり、無声化した母音とか鼻音化した母音といった認識はおそらくもっていないだろう。基本的に、このような母語話者がひとつの音として認識している音が「音韻」あるいは「音素」(phoneme)である。以下では、「音韻」と呼ぶことにする。「音韻」とは何かを定義するには難しい問題を含んでいるが、母語話者がひとつの音と捉えている音のひとつひとつを言うと考えておく。つまり、撥音はひとつの音であるというような認識は、音声学の知識をもたない人のものであると同時に音韻論学者のものでもある。

ここで音声学と音韻論という用語を簡単に説明しておく。⁵音声学とは言語に存在するあらゆる音を、発音の仕方、聞こえ方、音波などとして記述し、説明する学問である。音韻論は、個々の言語がどのような音韻の体系（音韻組織）をなしているか、あるいはある言語の中で使われる音声と音韻がどのような関係にあるかを記述し説明する学問である。そして、この音韻の体系は母語話者が知識として蓄えているものである。この知識を使って人は自由自在に言葉を

発音する。

音声学、音韻論を含む広い意味の言語学が、人のもつ言語の直観を説明するものであるとすれば、音韻論は日本語を母語とする人の音韻組織に対する認識を説明するものでなければならない。日本語を母語とする人がひとつの音として認識する「ん」は、詳しく音声的なレベルで観察すると後にみるようにさまざまな現れ方をする。だが、音韻論的にはやはり「ん」は直観通りひとつの音として考えるほうがさまざまな日本語の説明がしやすくなる。

以下の議論は以上のような、音声、音韻、音声学、音韻論といった概念と、言語学はある言語を話す人がもっている言語に対する直観を説明するものであるということを前提にしている。

2 日本語の音韻組織

さてそれでは日本語はどのような音韻組織をなしているのだろうか。⁶ 母音は /a i, u, e, o/ の5つ、子音は下の表にあげた通りである。() の子音は日本語には普通に存在するけれども音韻とは認めない音声である。

		両唇音	歯茎音	硬口蓋 歯茎	軟口蓋音	声門音
閉止音	無声	p	t		k	
	有声	b	d		g	
摩擦音	無声	(ɸ)	s	(ɸ)	(ç)	h
	有声		z			
破擦音	無声		(ts)	(tʃ)		
	有声		(dz)	(dʒ)		
鼻音	無声					
	有声	m	n, N	(ɲ)	(ŋ)(N)	
弾音	無声					
	有声		r			
半母音	無声					
	有声	w		j		

この表では日本語の子音は 15 個あるという考え方を示している。Block

(1950) では日本語の音素(phoneme.ここで言う音韻と同じと考えてよい)の数を母音も含めて 50 としているが、音素とは認めることのできないさまざまな音声の数えあげられている。

() で示した音声は、極めて限られた環境にしか現れず、特徴の類似した別の、極めて限られた環境にしか現れない音声が存在する場合に、それらを何らかの方法で関連づけようという考え方に基づいているのである。⁷この、音声的に類似した複数の音声を結びつける何らかの方法は「音韻規則」という。この「音韻規則」を使って、日本語の子音を上の子音表にまとめることができるという考え方を説明するが、その前に「音韻規則」という考え方を説明しておく。

3 音韻規則という考え方

上の子音表で () で示した音声は、ある音韻が、ある音声環境（前後にどんな音がくるか、あるいは語頭であるか、語尾であるか、など）の中で具体的に実現する姿であると考え、このような考え方は生成文法(generative grammar)を構成する生成音韻論(generative phonology)の考え方を利用したものである。

具体的な例をあげてみよう。英語の /l/ は、母音の前にくる場合と語尾にくる場合（音声環境をこの2つに設定することは簡略化したものと考えていただきたい）とで音色が随分と異なる。large の /l/ は明るい響きの良い音であるのに比べ、small の /l/ は暗い /u/ の音に似た響きをつ。暗い [ɫ] を明るい [l] と区別して [ɫ] の記号で表すことがある。このような現象を、

/l/ → [l] / _____ V

/l/ → [ɫ] / _____ #

のように表すことにする。つまり、第1行目は /l/ という音韻は母音 (V) の前では明るい [l] の音として実現せよ（あるいは発音せよ）という意味であり、第2行目は /l/ という音韻は後に音の切れ目(#)がくる場合は暗い [ɫ] として実現せよという意味を表している。このような式を「音韻規則」と呼ぶ。

「音韻」は具体的な音価をもたない。音声環境から独立して /l/ を発音せよと言われると明るい [l] を発音することが多い。しかし、明るい [l] が基本の形であって、それが語尾にきた時に暗い [ɫ] に変化するのではなく、抽象的な存在としての音韻 /l/ が具体的な音声環境の中で別々の音として実現すると考えるのである。後に論じるが、撥音を発音せよと言われると [n] の音を発する

人もあれば [un] と言う人もあるというように、一定していない。このことは、音韻としての撥音が一定の音価をもたないことの証拠である。

「音韻規則」には、このような「音韻」を設定するための規則の他に、「同化」とか「音の脱落」とかいう、本来の姿が別の音に変化したり、消失したりする現象を説明するための規則がある。詳しくは第6節で見るが、例えば日本語で *yukimasu* (行きます) は、人によっては語尾の *su* の母音が脱落して *s* となることがある。このような現象を音の脱落という。式で表すと、

$/su/ \rightarrow [s] /$ _____ #

のようになる.

4 子音表の（ ）で示した音の扱い

ここで、日本語では実際に存在するのに音韻としては認めない()で示した音はどう扱うのかということを、「音韻規則」で説明することにする。

(1) 兩唇摩擦音 [ɸ]

ハ行は音声的には [ha] [çi] [φu] [he] [ho] であり、子音は3つ使われている。これらの子音はすべて摩擦音であること、調音場所（どこで発音するか）が異なること、それぞれの音は現れる音声環境が異なること（このことを「相補分布」(complementary distribution) と言う）から、ひとつの音韻が後続の音声によって影響を受けて別々の音声として実現したと考えるのが適当である。両唇摩擦音 [φ] は、「標準式」ローマ字では *f* として表される。/f/ は唇歯摩擦音であり、この音で「ふ」の子音を表すことが英語学習者に混乱を招き、英語教育の中で発音指導上問題を起こしている。

さて、この両唇摩擦音は、*huro* (風呂) [ɸuro], *huton* (布団) [ɸuton], *huku* (服) [ɸuku] のように、必ず [u] の前で現れる。ということは、

$$/h/ \rightarrow [\phi] / ______ [u]$$

のような音韻規則を設定することで説明ができる。

(2) 軟口蓋摩擦音 [ç]

軟口蓋摩擦音 [ç] は *hito* (人) [çito], *hiroi* (広い) [çiroi], *hitori* (一人)

[çitori] のように [i] の前にしか現れない。したがって、

/h/ → [ç] / _____ [i]

という音韻規則で説明できる。

(3) 無声・有声歯茎破擦音 [ts] [dz]

タ行は [ta] [tʃi] [tsu] [te] [to], ダ行は [da] [dʃi] [dzu] [de] [do] のような音声として実現される。これらのうち, *tatu* (立つ) [tatsu], *tuma* (妻) [tsuma], *туру* (鶴) [tsuru], *niiduma* (新妻) [ni:dzuma], *manaduru* (真鶴) [manadzuru] の例にみるように, [ts] [dz] は [u] の前にだけ現れる。したがって、

/t/ → [ts] / _____ [u]

/d/ → [dz] / _____ [u]

の音韻規則で説明できる。

(4) 有声・無声歯茎硬口蓋摩擦音 [tʃ] [dʃ]

次に「ち」と「ぢ」の子音について見てみよう。これらは, *tikai* (近い) [tʃikai], *tikara* (力) [tʃikara], *tisiki* (知識) [tʃʲiki], *hanadi* (鼻血) [hanaɸi], *midika* (身近) [miɸika] にみるように, [i] の前にしか現れない。したがって、次の音韻規則によって説明することができる。拗音として現れる「ちゃ」「ちゅ」「ちょ」の[tʃ] については (9) 参照。

/t/ → [tʃ] / _____ [i]

/d/ → [dʃ] / _____ [i]

(5) 無声歯茎硬口蓋音 [ʃ]

サ行の発音は [sa] [ʃi] [su] [se] [so] であり, [ʃ] は *siken* (試験) [ʃiken], *sinbun* (新聞) [ʃimbun], *siraga* (白髪) [ʃiraga] のように必ず [i] の前に現れる。したがって、次の音韻規則によって説明できる。

/s/ → [ʃ] / _____ [i]

(6) 硬口蓋鼻音 [ɲ]:

ナ行の発音は [na] [ni] [nu] [ne] [no] で, *nihon* (日本) [nihon], *ninjin* (人參) [ninɕin], *nikai* (二階) [nikai] のように必ず [i] の前に現れる. したがって次の音韻規則で [ɲ] 音の出現を説明できる.

/n/ → [ɲ] / _____ [i]

[ɲ] は撥音の一つとしても現れるがこのことについては後に説明する.

(7) 鼻音群 [m] [n] [ɲ] [N]

まず撥音がどのような音声となって実現されているかを調べてみよう.

kankoo (観光) [kaŋko:]

kanpoo (漢方) [kampo:]

kantoo (関東) [kanto:]

kannin (堪忍) [kanɲin]

kan (缶) [kaN] or [kā]

[k] のような軟口蓋音の前では [ɲ], [p] のような両唇音の前では [m], [t] のような硬口蓋歯茎音の前では [n], [i] の前では [ɲ], 語の末尾では [N] となるか, 母音を鼻音化して自らは消失するというような現れ方をする. ここでは第4節のような式であらわすことは省略する. マ行, ナ行の子音は必ず母音の前にくるが, 語尾や子音の前にくる鼻音は撥音と言われるもので, 実際にはすくなくとも上述のような鼻音となって実現する.

(8) 有声音と無声音の対応

上で, タ行とダ行, サ行とザ行をまとめて扱った. その理由は, 音声的には [t] の有声音は [d] であり, [s] の有声音は [z] であるからである. ダ行のうち「づ」(*du*) の発音は [dzu] で, 「つ」(*tu*) の有声音としてのみ現れる. ザ行の「ず」(*zu*) の発音も同じく [dzu] で, *tizu* (地図) [ɸidzu] などの中に現れる. また, 「ぢ」は「ち」の有声音としてのみ現れる. 「ち(血, *ti*)」は「はな(鼻)」の後に続くと「ぢ(*di*)」になる. つまり *ti* → *di* の有声音化を起こしているのである. *zi* も [ɕi] で, *zibun* (自分) [ɕibun] などの中に現れる. 「づ」と「ず」, 「ぢ」と「じ」の音が同じであるから, かたかな, ひらがな, ローマ字ともそれぞれひとつの表記ですませるとするのは一見合理性があるようだが, このような有声音化を説明する上で問題を生じる.

上の子音の音韻表で /z/ を認めているが, 有声音歯茎摩擦音 [z] は少なくとも

筆者の日本語にはない。ザ行は [dza] [ɕi][dzu][dze][dzo]で、[i] の前でだけ [ɕ] になる。したがって音韻として /z/ を認めず、[dz] を設定するのが合理的と思われるかもしれないが、無声音の /s/ との対応関係から、/z/ を設定し、

/z/ → [ɕ] / _____ [i]

/z/ → [dz] / _____ [a][u][e][o]

という音韻規則があるものとする。

(9) 拗音

本稿では、「きゃ」「きゅ」「きょ」などの拗音は、/k/ + /j/ + /a/ といった子音と半母音の /j/（この半母音は日本式ローマ字では y で表記される）と母音の組み合わせと解釈する。したがって上の子音表 /j/ が音韻のひとつとしてあげてある。それでは「ちゃ」「ちゅ」「ちょ」「じゃ」「じゅ」「じょ」は [tʃ] [ɕ], 「しゃ」「しゅ」「しょ」「ぢゃ」「ぢゅ」「ぢょ」は [ʃ] [ɕ] の音をふくんでいるが、それはどう説明するか。

英語でも同じことだが、/t//d//s//z/ は /j/ と連続すると相互に影響しあってひとつの音になる（これを「融合」ということにする）。I want you to go. では want の /t/ と you の /j/ が融合して [tʃ] に変化する。また、Did you go? の did の /d/ と you の /j/ も融合して [ɕ] になるし、I'll miss you. で miss の /s/ と you の /j/ も融合して [ʃ] になる。このような融合は日本語で /t/ + /j/, /d/ + /j/, /s/ + /j/ でも同じことが起こっている。As you know, ... の as の /z/ は you の /j/ に同化されて [ʃ] になるが、日本語では /z/ と /j/ が融合して [ɕ] となる。

5 日本式ローマ字表記（一部）

ここで改めて日本式のローマ字表記の一部をあげておく。この表記法は「標準式」とは違って、第4節で述べた音韻規則に完全に対応したものである。サ行、タ行、ハ行などの子音を一部違った表記にすると、これから考える日本語の音韻変化をまったく説明できない。

a,	i,	u,	e,	o
ka,	ki,	ku,	ke,	ko

<i>sa,</i>	<i>si,</i>	<i>su,</i>	<i>se,</i>	<i>so</i>
<i>ta,</i>	<i>ti,</i>	<i>tu,</i>	<i>te,</i>	<i>to</i>
<i>na,</i>	<i>ni,</i>	<i>nu,</i>	<i>ne,</i>	<i>no</i>
<i>ha,</i>	<i>hi,</i>	<i>hu,</i>	<i>he,</i>	<i>ho</i>
<i>ma,</i>	<i>mi,</i>	<i>mu,</i>	<i>me,</i>	<i>mo</i>
<i>ya,</i>	<i>yi,</i>	<i>yu,</i>	<i>ye,</i>	<i>yo</i>
<i>ra,</i>	<i>ri,</i>	<i>ru,</i>	<i>re,</i>	<i>ro</i>
<i>wa,</i>	<i>i,</i>	<i>u,</i>	<i>e,</i>	<i>wo</i>
<i>n'</i>				

標準式と違う所をあげてみよう.

<i>si</i>	→	<i>shi</i>
<i>ti</i>	→	<i>chi</i>
<i>tu</i>	→	<i>tsu</i>
<i>hu</i>	→	<i>fu</i>

標準式は日本式とこのような対応関係があるが、これで解るように、標準式では音韻とは認められない音声を音韻として認めているが、それも不徹底である。例えば、

<i>hi</i>	→ ?
<i>ni</i>	→ ?

のような、明らかに音声的にことなった [h] と [ç], [n] と [ɲ] とを区別していない。このような不徹底の原因は、明らかに、英語で区別していない音は標準式でも区別しないということにある。

3 数詞の音変化とその説明

さて、ここで数詞の音変化の説明に入る。この音変化はもちろん IPA で表記することもできるが、ほぼ完全に日本語の音組織を捉えている日本式のローマ字でこの音変化を説明できる。そして日本式ローマ字を使って説明できるということは、日本式ローマ字が日本語の音韻組織を的確に捉えていることを証明することになる。

6.1 音変化の説明

日本語の音韻組織を調べるために、第5節でさまざまな音韻規則を用いた。音韻組織を調べるための音韻規則ばかりでなく、それ以外のいくつかの興味ある音韻規則が日本語に存在する。

6.1.1 促音

「イッパイ」「イッパツ」などのようないわゆる「詰まる音」を促音と言う。促音は、[p] [t] [k] [s] [ʃ] が連続して現れる現象である。

ippatu (一発)

ittyo (一丁)

ikkai (一階)

issun (一寸)

issin (一心)

この促音という現象ひとまとめにしてひとつの音素（アメリカ構造言語学の影響を受けた研究のなかでの扱いであるので、音素ということにする）として認めて /Q/ という記号を与え、音素表記で /ikQai/ のようにすることがある。⁸ もちろんこの考え方にも根拠があるのだが、撥音の場合とは違って、促音 /Q/ がまったく音声的な類似点をもたない5つの音声として実現するという考え方は、無理があるように思えるし、また、母語話者がひとつの音韻として認識しているとは考えられない。したがって、ここでは、*ikkai* (一階) は、基本的な形が

iti (一) + *kai* (階)

で、*iti* の後ろの *i* が省略されて *itkai* という仮想上の形ができ、次に *t* が *k* に同化されて *ikkai* という表面の形ができると考える。上にあげた語例のうち「一発」を除いて発音がどのように決定されるかを一覧表にした。

基本形	母音省略	同化	表面の形
<i>iti + kai</i>	<i>itkai</i>	<i>ikkai</i>	[<i>ikkai</i>]
<i>iti + tyo</i>	<i>ittyo</i>	[<i>ittyo</i>]
<i>iti + sun</i>	<i>itsun</i>	<i>issun</i>	[<i>issun</i>]

6.1.2 /h/ 音の変化

/h/ は日本語では通常語頭に現れ、語中に出てくると時によって [p] [b] [w] に変化することが多い。

/h/ が [b] に変化する例を見てみよう。

oo (大) + una (海) + hara (原) → oounabara

turi (吊り) + hasi (橋) → turibasi

kawa (川) + heri (縁) → kawaberi

oo (大) + hora (法螺) → oobora

次に、/h/ が [p] に変化する例を見てみよう。

suki + hara (腹) → sukippara

satu (札) + horo (幌) → sapporo

ippatu 「一発」の場合は、iti + hatu → ithatu の次に、/h/ が [p] に変化して ithatu が itpatu となり、次に t が p に同化され、ippatu という表面の形ができると考える。

6.2 数詞「本」の音変化

以上述べてきたことから、hon の pon, hon, bon への変化は、いくつかのプロセスを含んだ促音化、h の音の有声化、撥音の具体音への実現という極めて複雑な変化をそれぞれ選択しながら、表面上の形を形成してゆく。これを一覧票にすると以下のようなになる。

基本形	促音化	有声化	撥音の実現	表面の形
iti + hon	ippon		[ippon]
ni + hon	[nihon]
san + hon	sanbon	sambon	[sambon]

7 結論

以上述べてきたことから、日本語の音韻組織をもっとも的確に表しているローマ字表記は日本式ローマ字であること、標準式ローマ字と言われるものは英語式であり、これで日本語を表記することには問題があるということがわかつ

た。このことを証明するためには、音声、音韻、音韻規則といった概念を使うことが必要であり、こういった概念を使うことによって、*ippon, nihon, sanbon* といった *hon* がなぜそのような音変化をするのかを説明できることを示した。

〈注〉

*本稿は、1996年12月20日に帝塚山大学で開かれた帝塚山学園人間環境研究所例会での講演を文字にしたものである。また、本稿のもとになっている考え方は、八木(1984)、および1996年10月23日に韓国の Seoul National University で開催された The First Seoul International Conference on Phonetic Sciences において、“Some phonological rules that decide the phonetic forms of Janapese numerals”で明らかにした。Yagi(1996)は後者の同タイトルの論文である。

1 このようなローマ字に対する誤解は、よく言えば英語の普及と浸透のおかげ、悪く言えば、英語の言語帝国主義的な役割ということになる。外国語と言えば英語、という認識はこういう二重の裏腹の役割をもっている。

2 わが国の日本語のローマ字表記の論争やさまざまなローマ字表記の間の論争、その結果生まれた「内閣訓令式」については、佐伯(1975)、八木(1984)、八木・吉田・梅咲(1997)などを参照。

3 日本語の「う」は平口母音であるので、英語などの[u]とは違って IPA では [ɯ] の記号で表すが、本稿での議論には直接関係ないので、記述の都合で[u] と表記することにする。同様に、ラ行の子音は弾音であり、[r] ではなく [ɾ] を使うが、これも便宜上 [r] で表記することにする。

4 したがって、音声という用語は言語の中で意味のあるものとして人が使う音全体をさしている場合と、言語記述の単位として、音声学者の耳で聞き分けることのできる音ひとつひとつをいう場合がある。

5 大西(1984)はそもそも音韻論といった学問そのものを認めない立場を述べている。音声学会(編)『音声学大事典』もその立場が明確である。

6 音韻論者によって日本語の音韻体系についての考え方が異なるが、田中(1983)、小泉(1983)、中田(1983)、野元(1983)、馬淵(1983)、小泉(1990)などがそれぞれの考え方の違いをうかがうのに都合がよい。また、日本語の音声あるいは音韻組織について日本語教育学会(編)(1982:17)を見ると本稿とまったく違った立場の音韻組織の考え方があることがわかる。

7 英語の [ŋ] は *sing* のような語尾か、*finger, think* のように [g] [k] の前という極めて限られた音声環境にしか現れない。ということは、何かひとつの音韻が [g] [k] の前で実現した音声であると考えることができる。sing, song,

thing などの語尾の [ŋ] は実は [sing] というように [g] の前に現われ、その後に [g] が消去されたと考えることができる。この音韻は [ŋ] と [n] と相補分布をなすから、音韻 /n/ を設定することが妥当なところであろう。この議論は八木(1984)を参照。

8 このような考え方は例えば中条 (1989: 85f.) を参照。

〈参考文献〉

- 有坂秀世. 1959. 『音韻論』三省堂.
- Bach, E. and R. T. Harms. 1972. "How do languages get crazy rules?" in R. P. Stockwell and R. S. Macaulay (eds.), *Linguistic Change and Generative Theory*. Indiana Univ. Press.
- Bloch, B. 1950. "Studies in Colloquial Japanese IV: Phonemics," in M. Joos (ed.), *Readings in Linguistics I*. Univ. of Chicago Press.
- 橋本萬太郎. 1977. 「音韻の体系と構造」『岩波講座：日本語 5 音韻』岩波書店.
- 橋本萬太郎. 1980. 「音韻体系の比較」國廣哲弥（編）『日英比較講座 第1巻：音声と形態』大修館書店.
- 服部四郎. 1960. 『言語学の方法』岩波書店.
- 服部四郎. 1979. 『音韻論と正書法』大修館書店.
- Hyman, L.M. 1975. *Phonology: Theory and Analysis*. Holt, Rinehart and Winston.
- 今井邦彦. 1980. 「音声の比較」『日英比較講座 第1巻 音声と形態』大修館書店.
- 小泉 保. 1983. 「私の音韻論」『日本語学』Vol. 2.
- 小泉 保. 1990. 「私の五十音図観」『日本語学』Vol. 9.
- 小松英雄. 1981. 『日本語の音韻』（日本語の世界 第7巻）中央公論社.
- 黒田成幸. 1967. 「促音と撥音について」『言語学研究』（日本言語学会）No. 50.
- 馬淵和夫. 1983. 「私の音韻論」『日本語学』Vol. 3.
- 中条 修. 1989. 『日本語の音韻とアクセント』勁草書房.
- 中田祝夫. 1983. 「私の音韻論 — 小体験を報告しつつ」『日本語学』Vol. 2.
- 日本語教育学会（編）1982. 『日本語教育事典』大修館書店.
- 野元菊雄. 1983. 「私の音韻論」『日本語学』Vol. 2.
- 日本音声学会（編）. 1976. 『音声学大事典』三修社.
- 大西雅雄. 1984. 「現代音声学の課題」『日本語学』Vol. 3.
- 佐伯功介. 1975. 「日本語表記の系譜をたどる」『新日本語講座 9：現代日本

語の建設に苦勞した人たち』汐文社.

八木克正. 1984. 「日本語の音韻と音韻規則 — その断片」 *Helicon* No. 9.

八木克正. 1996. “Some phonological rules that decide the phonetic forms of Japanese numerals,” *The First Seoul International Conference on Phonetic Sciences*, The Phonetic Society of Korea.

八木克正. 1997. 「英語音声研究の実際 — transcription の方法と分析」
『英語音声研究』(英語音声学会)

八木克正, 吉田和男, 梅咲敦子. 1997. 『英語学概論』 英宝社.